

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	任 雅楠
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日中におけるデューイ思想の受容と展望に関する考察——大正期と中華民国期の比較を通して——			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	衛藤 吉則	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	後藤 弘志	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	関村 誠	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	後藤 雄太	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文では、デューイ研究において今日まで最も手薄である「デューイ思想受容に関する日中比較」に焦点を当て、その特徴の描出を課題とした。具体的には、両国にデューイの思想を紹介した谷本富、蔡元培、陶行知、胡適を軸に、受容の内容を比較していった。この考察を通して、各紹介が日本や中国の伝統文化と融合しつつ受容された実態が明らかとなった。さらに、その考察結果に基づき、両国が今日抱える教育問題に対する解決策を最後に提示した。具体的な研究内容は以下の通りである。</p> <p>序章では、先行研究を整理することで本研究の位置付けと研究意義を明らかにした。</p> <p>第一章では、日中における教育の現状と課題について整理した。日本については、国立教育政策研究所・子ども指導研究センターと文部科学省から公開された近年の資料・データを参照し、教育の現状と課題をまとめた。中国に関しては、中華人民共和国教育部等の公的な機関が作成した書類・資料に基づいて、教育の現状と課題を明らかにした。</p> <p>第二章では、主としてデューイ思想の根幹を規定する認識論を解明し、さらにプラグマティズムに基づく彼の思想の全体像を描き出した。対象とした文献は、デューイの主著 <i>Democracy and Education</i> (1916)、<i>Reconstruction in Philosophy</i> (1919)、<i>Experience and Nature</i> (1925)、<i>Art as Experience</i> (1934)である。</p> <p>第三章では、その哲学に基づくデューイの教育思想の全体的な構図を明らかにした。具体的には、<i>The School and Society</i> (1899)、<i>Democracy and Education</i> (1916)、<i>Experience and Education</i> (1938)等の原著を参照し、教育の本質論、内容論、方法論、職業教育、道徳教育等を解明した。</p> <p>第四章では、まず、日中におけるデューイ思想の受容に関して、日本は、谷本富の『新教育講義』(1906)、『系統的教育学綱要』(1907)を、中国は、蔡元培、陶行知、胡適の『蔡元培教育文選』(1980)、『蔡元培全集』(1984)、『陶行知全集』(1984)、『胡適全集』(2002)等を考察の対象とし、各人とデューイ思想との関係を解明していった。次に、これらの考察を踏まえ、儒教思想を基盤に持つ日中の知識人たちがプラグマティズムに立つデューイ思想をいかに受容し実践に応用したのかについてその特徴を明らかにした。</p> <p>第五章では、第四章までに解明された両国におけるデューイ思想の受容特徴を踏まえ、各々の国が抱える教育問題に新たな視点を提示した。具体的には、日本と中国の教育が影響を受けていた知育偏重主義やその基盤にある功利主義や多様な二元論的思考に対し、その弊害の克服を目指し得る、デューイ</p>			

ーイ思想がもつホリスティックな物の見方の有効性を示した。

終章では、本論文の内容を第一章から第五章まで振り返って整理した上で、本研究の意義と今後の課題・展望が述べられた。具体的には、本研究が、従来のデューイ研究で手つかずの状況にあった「日本と中国における受容比較研究」に着目し、デューイ思想が持つ、現実の生活を軸とした、人間—自然、精神—身体、主観—客観、個人—社会、理論—実践、理性—感情の即応と統合という特徴を、「儒教的プラグマティズム」とでも言うべき共通のパラダイムのもと描出した点は重要な研究意義を有し、加えて、この見方をもとに混迷する今日の教育を克服する見方を提起した点も評価に値する。

描出したデューイ理論をめぐる、多様な時代や状況との対応関係、実践への適用、理念・技術・本性に関する記述の解明等の研究については今後の発展を期待するが、本研究は全般に独創性に富み、今日的な学術上の意義を有するものとして高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)